

学生・卒業生をモデルに 進学意欲の向上を図る

立命館大学・立命館アジア太平洋大学(APU)

立命館大学が重視しているのは、個々の受験生の「意欲のスイッチ」を押すことだ。学ぶ意欲や学生生活を楽しむ意欲が高まれば、質の高い学生が育つと信じ、入学前から「スイッチを押す」ためのさまざまな機会を提供している。一方、APUでは、在學生と高校生が直接対面し、懇談する機会を増やしている。両校に共通するのは、コミュニケーション手段を用いて志願者の進学意識を育てる、というねらいだ。

立命館大学

試行錯誤を続けた 受験生向けサイト

立命館大学がいち早く取り組んできたのは、ウェブサイトの活用である。現在、立命館大学のウェブサイトには、受験生向けサイト「リッツネット」と、在學生に向けたサイト「RS WEB」が存在する。いずれも写真や動画を多用してリアルな大学の姿を伝えており、アクセスは月平均15万ページビューを誇る。

立命館大学が受験生向けに「リッツネット」を開設したのは、2001年のこと。会員制ページでは、「どんな学部をめざしているか」「何に興味があるか」などの情報を得て、それぞれの受験生に合ったメールマガジンを、当時は数種類発行していた。自動採点システムで苦手分野を指摘する「過去問にトライ」といったコーナーもあった。ネットを通じた「1to1」の細やかなコミュニケーションによって、大学や教職員のファンになってもらおうというね

らいだった。結果として、一部の受験生が熱烈な立命館大学ファンとなって入学に結びついた。

「その受験生たちは、自然に学生の中心メンバーになった。いろいろな場面で、大学の良さを周囲に伝える役割を果たしてくれた」と振り返るのは、当時を知る広報課の田中麻由氏だ。

だが、登録制のサイトでは、会員数がなかなか増えないという悩みがあった。しかも高校生の多くは、パソコンよりも携帯電話で情報を得るようになった。そこで、2007年に会員制をやめてオープンなサイトに切り替え、モバイルサイトを充実させていくことにした。

等身大の活躍を知れば 意欲のスイッチが入る

その間に、大学は多様化が目された時代から、教育の質が問われる時代へと移っていった。学生が4年間の大学生活をどのように過ごし、どう成長し、どこに就職したのか、保護

者や高校からも厳しく問われる時代になったのだ。

入試広報課の折田章宏課長は次のように話す。「本学も、教育に対する考え方や入学後のストーリーを積極的に発信するようになった。必要なのは、『立命館大学に入ればこうなる』というモデルを示すこと。大学が選んだ情報だけでは、受験生などの受け取る側にとっては押し売りのように見える。たくさんの等身大の事例を用意して、そのどこかに興味を持ってもらいたい」。

その考えが体现されたのが、2002年に開設した学生生活応援サイト「RS WEB」だ。タイトルの「RS」は「立命館スタイル」の略。等身大の大学像、学生像を閲覧者に提示しようというメッセージを込めた。

2010年4月の大幅リニューアルの際には、立命館大学のタグラインである「+R 未来を生まだす人になる」にちなんで、「+R 名人」というコーナーを設置。毎日1人、立命館大学らしい人物の紹介を始めた。スポーツや学業



受験生向けサイト「リッツネット」
(左)と学生生活応援サイト「RS
WEB」

で突出した成績を挙げた人ばかりではなく、ごく普通の学生が日替わりで登場。日によっては学生だけでなく、卒業生、職員、附属校の生徒なども紹介する。彼らが何に悩み、何に夢中になり、何をがんばって日々を過ごしているのかが伝わるインタビュー構成になっている。

「今の時代は、『リアル感』が求められている。リアルな情報を知りたいのは受験生も在生も同じ。『RS WEB』は本来は在生向けのサイトだが、受験生や保護者も見ている」と田中氏。

受験生は、「リッツネット」を入り口にして、立命館大学のことを知る。そこで興味を持てば「RS WEB」へと進み、学生たちのリアルな姿に出会う。大学への意識がそこから育ち始めるという流れが生まれている。

「学生の活躍を知って、入学を希望する受験生もいる。多くの学生の意識や生活を知り、意欲のスイッチを入れてもらいたい。スイッチが入れば質の高い学生が育つ。周囲が無理やりつくったスイッチではなく、本人が見つけたスイッチのほうが、結果的にがんばる力を引き出すことになる」と折田課長は話す。

先輩が後輩の学びをサポートする伝統

先輩が直接後輩をサポートするしくみもある。特にユニークなのは、戦後から続いている「オリター(オリエンテーションコンダクター)」制度。新入生の各クラス(約30人)に2、3年生のオリターが5、6人付いて、大学生生活の説明をしたり相談に乗ったりと面倒を見る。オリターを統括する団長は3年生である。

大学全体で、オリターは1500人ほどいるが、すべてボランティアで、自ら手を挙げた希望者ばかりだ。オリターのサポートを受けた1年生は、翌年、「今度は自分の番」と手を挙げる。このようなつながりが自然に生まれて、その関係が続いていく。立命館大学ならではのコミュニケーション・

サイクルといえるだろう。

先輩が後輩をサポートする伝統は、就職活動においても継承されている。就職の内定した4年生の有志は、JA(ジュニアアドバイザー)として3年生の相談に乗り、卒業してからも数年はCA(キャリアアドバイザー)として就職支援に当たる。このJAやCAの活動を担う若手卒業生が中心になり、2008年に新たに発足したのが「リコネクト」だ。リコネクトとは「Re:Connect」のことで、「もう一度大学とつながる」「同級生とつながる」「先輩後輩とつながる」という意味を込めて名付けられた。

本格的な活動が始まったのは、卒業生が集まる校友会と学内のキャリアオフィスの共同企画で東京で開催した「じぶんデザイン研究所」である。立命館への入学を考えている受験生を集め、大学とはどのようなところか、大学においてどのような学びを実践していくべきなのかという情報を、卒業生が自らの学生時代の体験をふまえながら伝える試みだった。こうした若手卒



リコネクト事業の一つとして行われているキャリア教育の「授業+R」。立命館大学の卒業生が高校2年生を対象に学生生活や仕事などについて語る。

業生による活動は受験生だけでなく、その父母からも好評を博し、関西地区や東海地区にもその輪が広がっていった。

事務局を預かる社会連携部校友・父母課の大西克樹氏は、「後輩のために何かできることはないか、大学に何か貢献できることはないかと考えたときに、若手の卒業生の中から自発的に生まれたのがこの事業。参加者には、オリター経験者も多い」と話す。

若手卒業生が 高校生に体験を語る

リコネットではいくつかの講演会や交流会を実施してきたが、その一つが、

高校生に対するキャリア教育「授業+R」である。

立命館宇治高校からの「大学生生活について話してほしい」という要望と、リコネット側の「後輩たちの役に立ちたい」という思いが合致し、2009年と2010年に2年生を対象に授業を行った。

何人もの卒業生が話をしたが、そこでの共通のキーワードは『35040時間』だった。これは、大学で過ごす365日×4年×24時間に当たる数字だ。これだけの時間をどう過ごすのか、高校生のうちから理想を描いておくことが大事だということを、まず伝えるところから授業は始まった。

世の中にはどんな職業があるかを高校生にリストアップしてもらい、何になり

たいか、その職業に就くためにどんな勉強が必要かを考えさせる。その後で、社会人になって数年目の卒業生が、自分たちの仕事について語る。今はバリバリ働いている先輩たちから、「高校時代には同じように悩んでいた」と語り掛けられ、遠かったはずの実社会を身近に感じ、大学に入ってからの自分を思い描くことができるようになる。この授業をきっかけに、保護者と生徒のコミュニケーションが深まったという。

意欲のスイッチが押された受験生は、入学後は意欲ある大学生となって後輩をサポートし、さらに卒業後も受験生に刺激を与え続ける。このコミュニケーションの連鎖が、受験生の進学意欲と資質を高めているという。

私立大学における学生募集活動への卒業生の関与の現状

学生募集への同窓会や校友会(以下、友愛組織)の関与について、私立大学563校に調査を行った東北大学高等教育開発推進センター入試開発室の鈴木敏明教授に聞いた。

——友愛組織が学生募集にかかわることに、どんなメリット・デメリットがあるのでしょうか。

友愛組織が母校の学生募集に関与している私立大学は約25%あります。母校と緊密な連携を取る友愛組織もあれば、情報を紹介する程度の浅いかかわりのところもあり、その方法、内容はさまざまです。

調査結果によると、「自分の出身校であるが故に、情熱を持ってリアルに紹介が行える」という意見と、「個人的体験による偏りが懸念される」という意見が並びます。内容はほぼ重なり合うもので、メリットとデメリットが表裏一体であることがわかります。

——今後、友愛組織が学生募集に関与する学校は、さらに増えていくのでしょうか。

一気に広まり普及する、という状況にはならないでしょう。しかし、先に述べたようなデメリットをコントロールできるなら、友愛組織との連携協力を強化する大学が出てくる可

学生募集活動への友愛組織の関与

活動内容	友愛組織の関与あり
1. 大学説明会	2.8%
2. 個別高校訪問	2.8%
3. オープンキャンパスの実施	2.0%
4. 大学案内情報誌やHPの作成	3.6%
5. 入学志願者の紹介	8.8%
6. その他の学生募集活動	11.2%
7. 友愛組織の関与はない	67.1%
8. 無答	7.6%

出典/鈴木敏明・石井光夫「同窓会および校友会等の友愛組織の学生募集への関与に関する調査研究(1)」東北大学高等教育開発推進センター紀要第3号(2008年)
*全回答数249件に対する割合(重複選択可)

能性は十分にあります。

——友愛組織が入試にかかわることをどう思いますか。

学生募集に比べ、入試や可否の判定に友愛組織がかかわることには、数倍の高いハードルがあります。入試の担当者たちが、「公平」「公正」「厳格」などを非常に意識しているからです。しかし、大学入試が変わっていけば、友愛組織が関与する選抜方法も生まれるかもしれません。おそらくは私立大学が先行する形で、意外と早い時期に現れる気がします。

立命館アジア太平洋大学 (APU) Face to Face で 受験生に刺激を

立命館アジア太平洋大学 (APU) が力を注いできたのが、ウェブを利用した学生募集だ。2000年に開学する前から、「APUメイト」と銘打った会員制のウェブサイトを開設。当時はまだ校舎を建築中だったが、早い時期から高校生に向けて、「バーチャル・キャンパス訪問」や「立命館入試の過去問に挑戦」など、数々のコンテンツを展開した。

興味を持った高校生に会員になってもらうことにより、一人ひとりと双方向のコミュニケーションを深めた。開学前年の夏にはAPUメイトを集めたセミナーを開催するなど、学びの先取り体験も行った。

これらの取り組みは一定の成果を収め、成功した。しかし、会員登録は受験生にとって手間がかかって利用しづらいということもあり、2004年に終了。現在はオープンなサイトにリニューアルし、在学生が発信するメッセージを数多く掲載する活気あるサイトとなっている。

アドミッションズ・オフィスの田澤直也氏は、「APUは、足を踏み入れなければ理解してもらいにくい大学かもしれない。例えば、留学生が多いためにキャンパス内で日本語以外のたくさんの言葉が聞こえてくるといった特徴は、紙媒体では伝わりづらい。そこで、ウェブサイトでは動画を積極的に活用し、学生の声や活動を見せたいと思っている。大学が遠くて来られないという人に、リアルなAPUの姿を知ってほしい」と言う。

ただし、現在、受験生に対しては、ウェブによる広報以上に、Face to Faceで情報やメッセージを伝えることを



APUの高校生研修の様子。年間4000～5000人の高校生がAPUを訪れ、留学生と交流している。

入学前の合格者に課される「APUノート」。1か国1ページずつ、その国のことをまとめる。



重視している。特に留学生との対面は、直接的な刺激を受験生に与えるからだ。

例えば、キャンパスまで大学の様子を見に来られない受験生に向けて、2010年は札幌、東京、名古屋、大阪、神戸、福岡の6か所で懇談会を開催。APUの留学生との対話を通して、キャンパスの空気を感じてもらっている。

また、他の大学には類を見ない規模で行われているのが、年間4000～5000人に上る高校生研修の受け入れだ。日帰りコースや1泊2日コースがあり、留学生の前で英語による発表をしたり、在学生との交流を楽しんだりする。研修の目的は、「英語学習のモチベーションアップ」や「異文化交流」となっているが、この研修がきっかけとなって意欲が高まり、受験するケースも少なくないという。

入学前に意欲を高める 「APUノート」

Face to Faceの取り組みは、受験

後も続く。合格者に対して、学生の半数を占める留学生との交流を円滑にするために実施されているのが、入学前に課される「APUノート」だ。APUには98の国や地域(2010年5月1日現在)からの留学生が在籍しているが、そのすべての国・地域について、人口や言語、興味のあるテーマなどを調べるというもので、専用のノートに1か国につき1ページずつまとめる。

「自分で手を動かして調べると、入学後に留学生の発言を聞いたときの関心や理解度がまったく違って来る。学生の47%、教員の44%が海外出身者なので、できるだけ広い視野を身に付けたいと入学してきてほしい」と田澤氏は話す。

入学後に教員によるAPUノートの採点と選考が行われ、入賞者には短期留学のための補助金が与えられる。学生の半数が留学生という大学の特徴を生かし、入学するまでの間に意欲を高めようというAPUならではの取り組みだといえる。